

ジョサイア・ストロングと彼の Nationalism

曾 根 曉 彦

(一) はじめに

1845年、Democratic Review 紙の編集者 John L. O'Sullivan が同紙の 7, 8 月号に「Annexation」(併合)と題する論文を掲載してテキサス併合を支持し、神によって与えられたこの大陸に領土を拡大していくことは「当然な宿命」(Manifest Destiny) であると論じたが、更にオレゴン併合に対して Massachusetts の Robert Charles Winthrop が下院で “..... the right of our manifest destiny to spread over this whole continent.” と論じてから有名となり、その後メキシコ戦争に際しても manifest Destiny という言葉が使われて広く流行語となったが、それは植民のはじめから新大陸にキリスト教を布教し、インディアンを教化することは神から与えられた使命であるという宗教的歴史的信念に基づく領土拡張の論理であった。しかし極西部を領有し更にカリブ海、太平洋へと膨張政策が進められていったときもその信念に裏付けられて正当化が主張され共和党の25代大統領 William McKinley もハワイ領有に際し “We need Hawaii just as much and a great deal more than we did California. It is manifest destiny.” と信念をもって発言することをはばからなかった。共和党上院議員 Albert J. Beveridge も1900年議会において “God had marked the American People as his chosen nation to finally lead in the regeneration of the world.” と論じフィリッピンの併合はこうした神の使命の一部を実行することに外ならないとし、アメリカ帝国主義の正当性をキリスト

教によって裏付けている。しかし民主党の政治家たちは反帝国主義を唱えて植民地を領有することはアメリカ民主主義の精神に反するとして論戦を展開して政界は勿論宗教界に経済界に大きな波紋を起した。そうした状況の下に1890年、アメリカの軍事評論家、海軍大学教授の Alfred T. Mahan は「The United States Looking Outward.」という論文でアメリカは今や帝国主義競争の時代に入って手をこまねていることは出来ない、ただ自国の力によって支えられた政策を促進することが出来るだけである。それ故 “Whether they will or no, Americans must now begin to look outward.....” と結んでアメリカの海外膨張政策を国民に広く訴えと共に海軍力の強化拡張を叫んで多くの著書、論文を発表した。

Josiah Strong が「Our Country」を出版したのは、Mahan の論文が出版された5年前の1886年であった。その正式の書名は「Our Country: Its Possible Future and its Present Crisis」(われらが祖国——その将来の可能性と現在の危機) であるが1916年までに175,000部が出版された。M. R. Beard 教授は「帝国主義的膨張政策を正当化せんとする試みに大衆的な魅力を与えることにもっとも貢献したものは会衆派教会の闘士ジョサイア・ストロングと軍略学者アルフレッド・マハンの2人であった」と述べているが、ビアード教授ばかりでなく多くの歴史家によって Strong は帝国主義的膨張論者として評価されている。しかし最近、といっても1966年のことであるが Long Island University の C. W. Post College 準教授 Dorothea R. Muller 女史が「Josiah Strong and American Nationalism, A Reeval-

uation」と題してJ.Strongの「Our Country」を分析検討して帝国主義的膨張論者としての見方に新しい批判を加えた論文を発表し話題を呼んだ。私もその論文を読んで興味を覚え、J.Strong の著書を読み返し、その思想の基底にあるものを考えて見たのが本稿である。

註1 Albert K. Weinberg, Manifest Destiny Mass. 1958 P.143.

註2 Winfred E. Garrison, The March of faith. New York 1933. P.174.

註3 Albert K. Weinberg, ibid P.459.

註4 Richard D. Hoffner, A Documentary History of the United States. New York 1956. P.213.

註5 Journal of American History. 53. New York 1966. P P.487—503.

(二) J.Strong と思想的背景

Josiah Strong は1847年1月19日 Illinois州のNaperville に生まれた。祖先についての詳しいことはよくわからないが1630年に Massachusetts 植民地に渡来した Elder J.Strong から彼は3代目で 1852年一家と共に Ohio州の Hudson に移り、1867年にその町の Western Reserve College に入学しているが両親は Josiah をその College に学ばせるのが目的で Hudson に移ったらしい。1869年に同校を卒業すると直ちに、Cincinnati の Lane Theological Seminary に入学して神学を修め1871年に同神学校を卒業して按手礼を受けたあと、遠く西方は Wyoming 州の Cheyenne の社会に赴き Missionary Church の宣教師として活躍し1873年 Hudson に戻り母校のチャプレンとなり神学、修辞学の講義を担当した。1876年 Ohio州のSundusky にあるFirst Congregational Church の牧師として赴任し5年間の在任中に深く社会問題に関心を抱いたが活動的な Strong としては満足せず、1881年再び宣教師となり、Ohio Congregational Home Missionary Society の書記として Ohio 溪谷各地に宣教事業を展開。更に1884年、Cincinnati の Central Congregational Church の

牧師として赴任し、1886年3月にその地において「Our Country」を出版した。

この書物は表紙の一番下のところに小さな文字で For the American Home Missionary Society と印刷してあるように、それは同協会の資金を集めるために協会の依頼を受けて出版されたものである。Amereican Home Missionary Society——アメリカ国内伝道協会——ではすでに 1841年に同じ題名で「Our Country : Its Capabilities, Its Perils, and Its Hope」というトラクトを出版しており、更に 1858年にも協会は「Our Country Number Two : A Plea for Home Missions」という 144 頁のものを出版しているので、さしづめ J.Strong の出版したものは Number Threeということになるだろうか。この書物は非常な売行きで3万ドルの資金が集められた。書名の Our Country——われらが祖国——という言葉は祖国アメリカを愛する宣教師たちの脳裡から離れない常日頃語られる、生活に結び付いた言葉であった。宣教師たちは伝道の使命感と共に祖国愛の精神に燃えていたからこそ異教徒の世界に生涯を捧げたのである。J.Strong も宣教師であった。彼をして宣教師の道を歩ましめ、祖国の危機を憂い、又その将来の可能性を信じて「Our Country」を執筆したその強烈な信仰はどこから生じたのであろうか。——それは若い彼を培った Ohio 州のピューリタンの精神的風土にあったといわなければならない。

Ohio 州の歴史を辿ってその精神的風土の形成を考えてみよう。アメリカ独立戦争後アパラチャ山系を越えて西部に移動した人々の群れは多くは Pennsylvania 西部から Ohio 川に沿って下った Presbyterian の Scotch-Irish であった。すこし遅れて1817年から25年にかけて Erie canalが完成したことによって New England の住民たちが西部に流れた。彼らは New York から Hudson 川を北上し、Albany から Mohawk 溪谷を越えて Canal によって Buffalo に到達、さらに Erie 湖の南岸に沿って Ohio の地域に流れたが、その移動集団の多く

は Congregationalists であった。Ohio川に沿って南下した Scotch Irish が1792年に Kentucky を、1796年に Tennessee を州としたのに続いて、Ohio が州となったのは1803年で、中西部地域では最も早く発展した。Ohio の地域を Second New England と云うほど多くの New Englander が Ohio に移った。しかし移住者の数に比較して教会の建設は遅れ90%の人々は教会との関係を持つことは出来なかった。

New England の Puritan 指導者たちにとって新しい領土、殊に中西部の教会事業をどうするかは大きな問題であった。彼らの胸中は新大陸をキリスト教化とするという遠大な使命感に燃えていたのである。Mayflower 号で渡来した最初の Puritan 達には国家建設のヴィジョンもなく、ただ摂理を信じて大西洋の彼方から未開の地に上陸して来た Pilgrims に過ぎないが、それでも船上で誓った Mayflower Compact には “Advancement of christian Faith” の文字が書かれており、1630年 Massachusetts 湾植民地建設のため渡来した J. Winthrop は上陸に先立って Arbella 号で行った説教 “A Modell of christian charity” で “Thus stands the cause betweene God and us, wee are entered into Covenant with him for this worke, wee have taken out a Commission, the Lord hath given us leave to drawe our ewne Articles we have professed to enterpri- se these Accions upon these and these ends, …” と述べているように New England 植民地³⁾に移住した人々は最初から、摂理に従って福音のために招ねかれて来たという使命感をいっていており、1643年に組織された「The New Englnd Confederation」にそのことを明確に次のように述べている。 “Whereas we all came into these parts of America with one and the same end and aim, namely, to advance the Kingdom of our Lord Jesus Christ and to enjoy the liberties of the Gospel in Purity with peace; and whereas in our Setting, (by a wise providence of God)

we are further dispersed upon the sea coast and rivers than was at first intended ‘……’”。Puritan 達は自分たちをアブラハム⁴⁾の精神的な後裔であると理解し、アブラハムが神に導かれた約束の地カナンになぞらえてアメリカを新しきカナンの荒野として受けとめ、彼らはイスラエル民族と同じように “Chosen People” であり, “Saints by calling” であった。新しき大陸を神から与えられ、キリスト教の世界とする使命感に燃えた彼らにとって新しき西方領土に福音の光を投げかけるにはどうしたらよいか——宣教師を送ることであった。1783年講和条約が調印されて新西部が領土となって12年、1795年に Timothy Dwight (1752—1817) が Yale College の学長に就任するとその信仰に動かされた多くの学生たちによって第2次信仰覚醒運動が起され New Haven を中心に Connecticut 植民地に広く伝道意欲が燃え上ると、漸く会衆派諸教会によって1798年 Missionary Society of Connecticut が組織され、その目的とするところは “Christianize to heathen in North America, and to support and promote christian knowledge in the new settlements within the United States” であった。⁵⁾その後1822年には長老派とオランダ改革派の協同によって United Domestic Missionary Society が組織され、1826年には両 Society が結合されて American Home Missionary Society となり宣教地域を中西部、殊に Ohio から Indiana, Illinois, Iowa⁶⁾にかけて広げていき、New England の宣教精神を燃え上らせ、やがて J. Strong が使命感に燃えてその宣教活動の第一線に立ったのである。

J. Strong を宣教師という使命感に立ち上らせたものは彼が学んだ2つの教育機関であったことを忘れてはならない。彼が1867年に入学した Western Reserve College は大学名が示すように Connecticut 植民地が要求して1792年に承認された Connecticut Western Reserve——コネティカット西部保留地——に設立されたものであった。したがって当然のことで

あるが Yale College に準じて研究課程がおかれ大学運営組織も殆ど同じで、最初の学長 George E. Pierce は Yale の卒業生で Dwight 学長の信仰を受け継ぎ Yale の学風を取り入れ、教授の交換も行なわれて強いピューリタン精神が流れており、更に後に彼が学んだ Cincinnati の Lane Theological Seminary は 1832 年に設立されると同時に Lyman Beecher (1774~1863) が初代学長に任ぜられた。彼もまた G.E. Pierce と同様 Yale の卒業生で、やはり T. Dwight が学長のときにその学生で Yale の信仰覚醒運動に参加した 1 人であった。Western Reserve College も Lane Theological Seminary も、いわば Yale College の姉妹校でその学長 Dwight の強い Puritan 信仰を Ohio において再燃させたのであった。この 2 つの学風のもとで教育を受けた J. Strong が卒業後宣教師として遠く Wyoming の Indian の地に赴いたことは教育を通して彼の心の中にピューリタンの信仰が強く受け継がれていたことを物語っている。

宣教師 J. Strong は「Our Country」を出版して一躍アメリカ全土に有名になり、その年 11 月に Evangelical Alliance for the United States (合衆国福音主義同盟) の総主事に任ぜられてアメリカのプロテスタント教会の最高指導者となり彼の生涯の転機を迎えた。その後は同盟を通して教会会議を催し、当時当部諸教会を中心に勃興しつつあった Social Gospel Movement (社会福音運動) の中心に立って大きな影響を与えた。1898 年同盟を辞任して League for Social Service (社会奉仕同盟) を組織して教会の社会的活動に生涯をささげた。その間幾冊かの書物を出版しているが 1893 年「The New Era」(新時代) を出版しアメリカ国内で 46,000 部が読まれ、イギリス、フランス、スイスなどでも翻訳出版され、これによって彼の国際的地位が確立した。「Our Country」に比較すると記述が非常に穏やかになっているのも彼の立場が宣教師から同盟総主事に移ったことに原因があろう。

註 1 1890 年に国勢調査が行なわれたため、その統

計資料を利用して 1891 年に改訂版が出版された。私の所蔵しているものはこの改訂版を 1963 年に、Harvard University Press が復刻したもので、本文 256 頁となっている。

註 2 Turner, F. J., The Frontier in American History. N.Y. 1920. p p. 1—38.

註 3 H.S. Smith, R.T. Handy, A. Loetscher (ed.), American Christianity. Historical Interpretation with Representative Document. Vol. 1., N.Y. 1960. p. 101.

註 4 MacDonald, W., ed., Select Charters p 120.

註 5 Sweet, W. W., The Story of Religion in America. N.Y. 1950. p. 244.

註 6 独立後開拓民の西部移動に伴って長老派も会衆派も西部への宣教活動に乗り出し N.Y. 州から Ohio 州にかけて両派が協力活動を計画し 1801 年「Plan of Union」が結ばれ、其の後も教派の対立問題は無く American Home Missionary は超教派活動であった。

Thompson, R.E., A History of the Presbyterian Churches in the United States. N.Y. 1894. p p. 353—355.

註 7 Mathews, L. Kimball., The Expansion of New England. N.Y. 1962. p p. 186—190.

註 8 Ahlstrom, S.E., Religious History of the American People. New Haven 1972. p p. 458—59.

Kelly, Robert L., Theological Education in America. N.Y. 1924. p. 328.

註 9 Hopkins C.H., The Rise of the Social Gospel in American Protestantism. New Haven. 1940. p p. 98—117.

(三) 「Our Country」と Nationalism

J. Strong は「Our Country」をアメリカ国内伝道協会のために書いたものであるがその副題が示すように、その内容は祖国アメリカの「Possible Future」——将来の可能性——と「Present Crisis」——現在の危機——の二面であった。彼は現在のアメリカ社会は危機のうちにあるが、その基礎をなすキリスト教の信仰によって神に従うなら必ず将来には果てしない可能性があるというのである。本書がアメリカ帝国主義を推進し、膨張論を謳歌している

と評価されるのはその“Possible Future”の思想であるが、先づ“Present Crisis”についての彼の考えに一言触れてから論じたい。現在の危機とは何か、それは南北戦争後におけるアメリカが農村社会から都市社会へと急速に変化したことである。南北戦争後の New England から中西部にかけての産業都市の発達を招ねいた人口の流れは南欧、中欧、からのいわゆる新移民の群れであるが、そこにアメリカの危機を見たのである。彼ら新移民は多くカトリック教徒であり、その急増はプロテスタント国家にとって大きな危険であるという。その上新移民達の貧しさが招ねいた社会主義、階級闘争の風潮は将に南北戦争以前の農村的、プロテスタント的、ヤンキー的民主主義社会を破壊しようとしているというのである。J.Strongは“*We have seen how the dangerous elements of our civilization are each multiplied and all connected in the city*”¹⁾とのべ産業都市の危機を自らの牧会地 Cincinnati¹⁾に見たのであるが、宣教師でありピューリタンの理想に生きた J.Strongにとってアメリカはその昔イスラエル民族に与えられたカナン²⁾の地と同じく、世界各地から移住してくる人々の“*the land of promise*”（約束の地）であって彼らをキリスト教化することはアメリカのキリスト教徒の責任であり、それによって彼らをも又アメリカ人とすることができるのであった。——“*Christianize the immigrant and he will be easily Americanized*”。従来宣教師の任地は大概ねフロンティア社会であったが今や宣教師の任地は都市であり移民への宣教が義務づけられなければならなかった。S. E. Ahlstrom, も国内伝道（Home Mission）の南北戦争後における重大な変化はその実際の働きが西部にでなく東部に、フロンティアにでなく都市に移ったと指摘している。かつてはインディアン⁴⁾に対して、現在は移民に対してキリスト教化することは外国人、異民族をアメリカ化する一つの努力であったことを忘れてはならない。そこに強い愛国精神が生まれるのは当然なことであった。

J.Strong にとって、宣教師とは、移民が入国して来るのを待って宣教するだけが仕事のすべてではなかった。アメリカのキリスト教徒は、より積極的な使命を神から与えられている筈である。彼は次のように述べている。

“*Ours is the elect nation for the age to come. We are the chosen people. We can not afford to wait. The plans of God will not wait. Those plans seem to have brought us to one of the closing stages in the world career, in which we can no longer drift with safety to our destiny*” —選ばれた民、それは将にイスラエル民族⁵⁾の精神的後裔であり、カルヴァン主義の Providence の信仰であった。

選ばれた民—Anglo Saxon には世界進出の使命があった。しかしそれは決して政治的、経済的性格のものでなく、その目的は世界のキリスト教化であった。その準備として神は、この新しきイスラエル民族をこの大陸において訓練しているのである。“*God is training the Anglo-saxon race for its mission, ……*”⁶⁾

“*This country is his chosen instrument of blessing to mankind. ……*”⁷⁾ 選ばれた民である Anglo-Saxon が選ばれた国アメリカに於て他民族のキリスト教化という訓練を受け、いつの日か世界宣教のために進出するであろうことは確実なことであった。その時はいつ訪れるのか、現在ヨーロッパやアジアの諸地域に見られるように生活のための物資を上廻って人口が増加するときがアメリカにもやがて来るであろうがその時に世界は新しい時代に入る——それは民族闘争の最終段階の時であって彼らははそのときのために訓練されている——*the final competition of races, for which the Anglo-saxon is being schooled*。そして、そのあとにこう述べている“*It I read not amiss, this powerful race will be down upon Mexico, down up Central and South America, out upon the island of the sea, over upon Africa and beyond. And can any one doubt that the*

result of this competition of races will be the "Survival of the fittest"? ——もし私の読みに間違いがなければ、この⁸⁾すぐれた民族がメキシコへ下り、中南米に下り、海洋の島々に出で、アフリカへ拡がり、そして更に海洋の彼方へと拡がっていくであろう。この民族間の競争の結果が「適者生存」でなくてなんであろう——と云うのである。J. Strong のこの文章がしばしば歴史の論文に引用されて彼が帝国主義的膨張思想家であると見做される有名な個所である。

たしかに南北戦争のあと Anglo-Saxon 優越思想が勃興し、帝国主義的気運が広く社会を覆うと南北戦争の時期には余り省りみられなかった Darwinism の理論が平和回復と共に関心をもたれ、この "Survival of the fittest" の言葉が John Fiske (1842—1901) をはじめ多くの歴史家、哲学者によって利用され帝国主義的膨張論の理論の裏付けとなり、J. Strong も Fiske らと比較されて来たのであってそれに異議を挟む者もいなかった。最近でも⁹⁾ S. E. Ahlstrom はこの Strong の文を引用して、彼はスペイン戦争の background music を奏でる evangelical chorus の指揮者となったと評価している。

¹⁰⁾しかし Dorothea R. Muller は、彼が当時流行語のこの言葉を使ったのはただ利用しただけであって、J. Strong の Nationalism の哲学は Darwinism に基礎づけられたものではなく、ただアメリカの宣教師として全世界の福音化 (World evangelization) を目標としているその義務を果さなければならない責任感から使用されたものであって、たしかに19世紀後半のアメリカはこの義務を果すのに適しい機会であったと論じている。

¹¹⁾更にすすんで D. R. Muller は論文の中で、J. Strong がしばしば使用している extension, spread という言葉は Anglo-Saxon の "migration tendency" についての表現であり、又 "Occupy the land", "possess the land", "new fields of conquest", "world conquering power", といった種類の言葉を

屢々使用しているが、それは一般に American Home Missionary Society の宣教師たちが日常使用している戦闘的信仰の表現であってそれをもって直ちに J. Strong を帝国主義者と判断することは誤っているという。

たしかに「Our Country」に¹²⁾使用されている激しい言葉も、インディアン達への戦闘的な宣教活動から出ているもので、「The New Era」が穏やかな表現となっているのは彼が宣教師の立場を離れた後の文章だからであろう。

彼は帝国主義的膨張論を主張しなかったにしても、神に選ばれた民である Anglo-Saxon は J. Fiske と同様、その民族の卓越性を信じたことは否定できない。ただ J. Fiske のそれと違うところは、卓越性の基調を¹³⁾Darwinism の自然淘汰説におかないで市民的自由 (Civilliberty) と精神的キリスト教 (Purest Christianity) の2つの観念の上においたことであつた。そこに彼独得の Nationalism があり、民族主義¹⁴⁾があつたが、それは排他的なものでもなく民族的独善を主張したものでもなく、精神的キリスト教故に他民族に卓越しているにすぎないのであつた。塩にたとえてこう述べている。——

"Every civilization has its destructive and preservative elements. The Anglo-Saxon race would speedily decay but for the salt of Christianity. Bring savages into contact with our civilization, and its destructive forces become operative at once, while years are necessary to render effective the saving influence of christian instruction". 続いて、地の塩として選ばれた我々はキリストにならって犠牲の奉仕を異教徒のために献げなければならないと次のように結んでいる。——Christ did not die for the sake of dying, but to save a world; and he does not inculcate self-denial for the sake of self-denial, but for the sake of others. Christ said "Go ye into all the world, and preach the gospel"

¹⁵⁾神はキリスト教国民を異教世界の福音化の事

業のために備えるのであって、そのためには先
ず祖国アメリカの国土にキリストの王国をもた
らさなければならないがそれはいつのことであ
ろうか——I believe it is fully in the
hands of the christian of the United
States, during the next ten or fifteen
years, to hasten or retard the Coming
of Christ's kingdom in the world by
hundreds, and perhaps thouthands, of
years. ——と彼はいう。¹⁶⁾

そしてアメリカが来るべき時代のために選ば
れた国であり、われわれが選ばれた民である
信念に立つなら——And our plea is not
America for America's sake; but Ame-
rica for the world's sake. ——われわれの
願いはアメリカのためのアメリカでなく、世界
のためのアメリカである。Yale 大学の Hop-
pin, James Mason も言う——アメリカのキリ
スト教化は世界のキリスト教化を意味する。¹⁷⁾

註1 J.Strong., Our Country. P.177.

註2 ibid. P.42.

註3 ibid. P.247.

註4 Ahlstrom, S.E., A Religious History
of the American People. New Haven.1972.
P.865.

註5 J.Strong., ibid. P.254.

註6 ibid. P.216.

註7 ibid. P.252.

註8 ibid. P.214

註9 Hofstadter R., Social Darwinism in
American Thought.

註10 Ahlstrom, S.E., ibid. P.850.

註11 J.Strong, The New Era. N.Y. 1893.
P.68.

註12 Muller, Dorothea R., Josiah Strong
and American Nationalism. P.489.

註13 Muller, D.R., ibid. P.489.

註14 Bannister, Robert., Social Darwinism.
Philadelphia. 1979. P.229.

註15 J.Strong, Our Country. P.215.

註16 J.Strong. ibid. P.230.

註17 J.Strong. ibid. P.253.

註18 J.Strong. ibid. P.253.

— III —

(四) 「The New Era」と Nationalism

1886年「Our Country」が出版されると
J.Strong——当時 Cincinnati の Central
Congregational Church の牧師であった——
は一躍有名となり、12月に彼は自分の教会で
Inter-Denominationl Congress (超教派教
会会議)を開催し、L.Abbott, R. T. Ely.
W. Gladden. A. H. Bradford 達いわゆるキ
リスト教社会運動家たちを招ねいて、激変する
社会の諸問題について討議が行なわれた。その
討議の中心となったものは彼が「Our Country」¹⁾
の中で8つの章にわたって記載した Immi-
gration, Romanism, Religion and public
School, Mormonism, Intemperance Soci-
alism, Wealth, The City の項目であった。
それは副題の Present Crisis に当たる部分
で、彼はそれに “Perils” と呼称をつけている
が。彼は会議の結果 Promoter としての能力
が認められ前述したように Evangelical Alli-
ance for the United States (合衆国福音主
義同盟)の総主事に任命されると共に結果的に
はキリスト教社会運動——Social Gospel
Movement——の指導者ともなった。Cincin-
nati の超教派教会会議に出席した Richard T.
Ely も J. Strong とほとんど時を同じくして
キリスト教社会運動の一翼を担うこととなり
J.Strongに大きな影響を与えた。R. T. Ely²⁾
は経済学者としてドイツ留学から帰国し1885年
N. Y. 州のSaratoga で American Econom-
ic Association を組織し、経済学研究の成果
を教会の社会活動のために献げて行こうとい
う意図をもって発足しキリスト教社会運動に学
問的な基礎が置かれることとなった。殊に R. T.
Ely が1888年に出版した「Social Aspect of
Christianity」(キリスト教の社会的側面)は
J.Strongが1883年に出版した「The New Era」
(新時代)に大きな影響を与えた。

ともあれ、J.Strong が総主事となった合衆
国福音主義同盟は全国のプロテスタント教会の
組織であると共に Evangelical Allianceは国
際的な運動で各国に支部が置かれてあるもので

1883年には万国博覧会に際して Chicago で World's Parliament of Religion (世界宗教会議) が J.Strong の努力で催され R.T. Ely らキリスト教社会運動の学者たちによって Social Gospel の立場から社会問題の提起がなされ、J.Strong の国際的立場も確立しその思想体系にも大きな発展が見られるようになった。それは発展であって変化ではないことに留意しなければならない。「The New Era」に描かれた神の国の理想、来るべき社会、統合された国際社会等の構想は、「Our Country」を著した時の彼の国内伝道概念の拡大であると理解される。

新時代——The New Era——とは何であるのか、第1章の書き出しはこういう文章である——We are entering on a new era of which the twentieth century will be the beginning and for which the nineteenth century has been a preparation. 要するに19世紀という準備の世紀が終って20世紀という新時代に入ろうとしているのであるが、何が新しいのであろうか、それはこの新時代に人類は益々 Anglo-Saxon の影響の下におかれ、やがては神の国が地上に実現するのであるが、その時が来るまで神は測り知れざる知恵とわざとによって Anglo-Saxon を訓練しているのであって、——それは彼の宣教師以来の信念で「Our Country」にも屢々出てくるが——やがて世界はその歴史の新時代に入ろうとしているとし、彼は Anglo-Saxon 殊に America 人に優越観を抱いて——Anglo-Saxons, far better than any other race, have solved the problem of uniting individualism with organization; and Americans, far better than English men, are working out the co-ordination of these two principles as applied to government. と論じ、しかも北アメリカはこの偉大な民族 Anglo-Saxon の未来のふるさとであり、それは全 Europe の2倍の広さがあって現在の全世界の人口を養うことができ、神のもとにあって世界の将来を支配する王国の到来の

ために準備するのに適しいという。

J.Strong は「Our Country」の宣教師的表現による強い愛国的精神に比較して「The New Era」の思想には、文章は穏やかであるがより民族優越主義的なニュアンスを示しているといわなければならない。就中、第3章では神の国の到来までの準備として Anglo-Saxon の現在までの歴史的、精神的背景に就てそれを民族史的に論じている。即ち、キリストの教会は Hebrew, Greeks, Romans の三民族の3本柱の上に立てられており、Hebrew はいかなる民族より精神的でありキリスト教的であるし、Greeks は世界語として最も適しい言語をもって世界最高の文学を創造し、更に Romans は法律と秩序と政治において無比の天才であった。そして現在の Anglo-Saxon はこの3民族の優れた文化を吸収しており、地上に神の国を来らすべく神から選ばれているというのである。

4) J.Strong はまず Anglo-Saxon の優秀性を論じたあと、神の国の倫理とその到来の条件についての記述が続くが、その思想の背景に R.T.Ely の影響が彼の思想と二重映像になって浮び上ってくるのである。

R.T.Ely が1889年に出版した「Social Aspect of Christianity」はその冒頭に新約聖書マタイによる福音書22章34節—40節を引用してその内容から論述をはじめているし、J.Strong も同じ箇所を引用しているので下に記しておく。

パリサイ人ら、イエスのサドカイ人らを黙さしめ給いしことを聞きて相集り、その中なる1人の教法師、イエスを試むるために問う。『師よ、律法のうち、孰れの誡命が大なる』イエス言い給う『「なんぢ心を尽し、精神を尽し、思を尽して主なる汝の神を愛すべし」これは大にして第1の誡命なり。第2もまた之にひとし「おのれの如く、なんぢの隣を愛すべし」律法全体と預言者とは此の2つの誡命に拠るなり』

R.T.Ely によれば真のキリスト教は上記イエスの「神への愛」と「人への愛」の2つの命令を遵守することであるとし、そこから実践的キ

リスト教の倫理を論述しているが、J. Strong の論述も殆ど同じで「The New Era」の第6章 The Two Fundamental Law に記述されている。彼によれば第1の法則は神への愛であって、それは Piety (敬虔)でこの部分を扱う科学は Theology (神学)であり、第2の法則は人への愛であって、それは所謂 Philanthropy (博愛)でありこの部分を扱う科学は Sociology (社会学)で両者ともに教会を通して研究されるべき学問であってこの原理が完全に同等になり愛によって結び合わされたときこそ人類が完全な社会を形成したときで、その時に「神の国」は地上に到来するであろうとした。——The kingdom of heaven, which cannot fully come on earth until mankind is perfected, must exhibit the complete development and the perfect coordination of these two principles. 以上の文章はすべて R. T. Ely からの受け継いだものであるが、R. T. Ely は社会学は「社会の科学」(the science of society)であり神学は「神の科学」(the science of God)であって、過去のキリスト教が神学のみを重視し社会学を忘れていたが故に社会の進歩に貢献できなかったのであり、宗教とは神学と社会学とが結び合わされるときに成立するものであるとした。Ely が American Economic Association を組織した目的は教会を助けるために第2の法則である社会の科学を研究することであるとし——“its purpose is to study seriously the second of the two great commandments on which hang all the law and the prophets. in all its ramifications, and thus to bring science to the aid of Christianity.” と述べている。たしかにアメリカ経済学会が創立されるとキリスト教社会運動家の多くの牧師たちが加入し、一般の経済学徒、社会学徒の会員たちと共同して積極的に研究し調査を行い、更に1893年には R. T. Ely を中心に American Institute of Christian Sociology (アメリカ・キリスト教社会学研究所) が New York 州の Chautauqua

に設立され、より専門的に社会学の研究がすすめられ、J. Strong も所長の任にあって経済学会と共に平行してキリスト教社会運動の学問的裏付けが行なわれると共に広く社会に向って神の国こそ人間の社会の理想として示すことを目的とし、そのために講演を行い出版物を刊行しライブラリーを設備しキリスト教会の社会的啓蒙運動を展開した。社会学という科学をもってキリスト教の社会性を主張しそれによって社会問題の解決を志した1890年代の教会の背景には中西部農民の政治的社会運動の勃興——Populists の結成——があったことを忘れてはならないであろう。

J. Strong は「Our Country」においては、ただ社会の諸問題を提起し国民に訴えただけであったが、「The New Era」においては積極的にその解決の根拠としての科学を信仰との関連において論じ、両者の間には一致協力であっても決して対立はあり得ないことを強調した。なぜなら神の方法も科学的だからであるとしてこう論述している——“We are beginning to see that God's method are scientific, and if we would co-operate intelligently with him, our methods must be scientific also.”

したがって科学の発展とは取りも直さず神の法則の発見であり、文化の発展とは、その神の法則の人間生活への応用以外の何ものでもない。そこから科学の力によって神の国の到来が促進されるのである。J. Strong は科学についてこう説明する——“Science, which is a revelation of God's laws and methods, enables us to fall into his plans intentional and to co-operate with him intelligently for the perfecting of mankind, thus hastening forward the coming of the kingdom.”

このように科学、文化の発展が神の法則と表裏一体として考えられるようになると、おのづから「Our Country」において考えられていたような近代産業都市に対する危機感、罪悪感の意識は影をひそめ、新興都市の出現、鉄道、

電信の発達から国富の蓄積にいたるまで凡てはただ巨大 (Simply enormous) であり、アメリカ近代文化の精神はすぐれて進歩的 (eminently progressive) であると考えられるようになり、その豊かさと純粋なキリスト教、そしてその最高の文化に期待がかけられる。続いてこう記している。——Then this race of unequalled energy, with all the majesty of numbers and the might of wealth behind it——the present, let us hope, of the largest liberty, the purest Christianity, the highest civilization——having developed peculiarly aggressive traits calculated to impress its institutions upon mankind, will spread itself over the earth.——そして彼は¹⁰⁾この記述のあとに「Our Country」の214ページに書いたのと同じ文章をもって結んでいるのである。——“And can any one doubt that the result of this competition of race will be the survival of the fittest?” (本稿6ページ参照)

“Survival of the fittest” の言葉は両書物において内容的にどう違うのであろうか。私はこう思うのである。前書の場合は本稿でも記したが D. R. Muller の論文のように彼の思想が Darwinism でないとするならば、当時一般に広く用いられていたその言葉をただキリスト教の宣教の働きを表現したに過ぎないであろう。しかし、後書の場合は帝国主義的概念からではないにしても、この言葉の中にはキリスト教の福音の世界化と共にアメリカ合衆国の世界的発展の時期が到来していることに大きな期待と信頼をかけていることが推測されるのである。J. Strong にとってアメリカの宿命は世界に対して宿命であり、それが摂理の信仰であることはピューリタンの伝統であった。彼の結論はこうである——As goes America, so goes the World

¹¹⁾
註1 Charles Howard Hopkins, The Rise of the Social Gospel in American Protestantism, New Haven, 1940. pp. 115—116.

註2 拙稿, 「R. T. イリーの社会改良思想につい

て」史観 (早稲田大学史学会発行) 第53冊参照。

註3 J. Strong. The New Era. N. Y. 1893. p. 76.

註4 J. Strong. ibid. pp. 41—53.

註5 J. Strong. ibid. p. 115.

註6 Richard T. Ely. Social Aspect of christianity N. Y. 1889. p. 25.

註7 William D. P. Bliss. (ed). Encyclopedia of Social Reform. N. Y. 1898. pp. 45—46. に協会の Object が記録されている。

註8 James Dombrowski. The early days of Christian Socialism in America N. Y. 1977. p. 110.

註9 J. Strong. The New Era. p. 65.

註10 J. Strong. ibid. p. 79.

註11 J. Strong. ibid. p. 16.

(五) おわりに

1898年6月1日に合衆国福音主義同盟の総主事を辞任して積極的にキリスト教社会運動を促進する意図のもとに League for Social Service (社会奉仕同盟) を組織して多くの同志と共に資料の収集、コンサルタントと調査、定期刊行物の発行、講習会の開催等多彩な計画が立てられ実行に移されたが、特に1908年から1916年 J. Strong が死去するまで刊行された「The Gospel of the kingdom」(神の国の福音) は多くの社会問題——労働問題、移民問題、婦人問題等——についての具体的な資料、実際の改革への努力などが掲載され啓蒙的な役割を果たした。その間1900年に「Religious Movements for Social Betterment」(社会改善のための宗教運動) を著し、19世紀の時期に文化がそうであったように宗教活動の変化を「個人主義的タイプから社会的なタイプへ」(from individualistic to the social type) へ移ったと記した。それは端的に、J. Strong の歩んで来た道¹⁾を物語っている。アメリカ大陸のインディアンをはじめ異教徒たちをキリスト教化することによって国家を神に捧げていくという理想を New England の精神から受けつぎ、宣教師という個人主義的な働きに使命をもち西は Wyoming から東は Ohio 溪

谷へとエネルギーに活動し、生涯の半ばかりキリスト教社会運動の先端に立って社会的、国際的な活動に移ってからも若き日に養われた愛国的な伝道精神とピューリタン精神とは全生涯を一貫して流れていたのがあった。彼のナショナリズムは19世紀のアメリカ合衆国膨張期の

風潮の波に重なっていたとしてもその根底にあるものは宣教師としての伝道精神にほかならなかった。

註1 Charles Howard Hopkins, *The Rise of the Social Gospel in American Protestantism*, New Haven, 1940. p.261.